議員定数検討特別委員会

平成25年9月18日午後1時30分から委員会室で開かれた。

1. 出席議員

宮崎 和彦	小林 誠	◎中川 靖広	伴 吉晴
紀 良治	嶋田 善行	小野 隆雄	坂口 徹
飯高 昭二	辻 善次	○里川宜志子	木澤 正男
木田 守彦			
中西 議長			

2. 欠席議員

吉野 俊明

3. 会議の書記

議会事務局長 藤原 伸宏 同 係 長 大塚 美季

4. 審査事項

別紙の通り

開会（午後1時30分）

署名委員 伴委員、紀委員

委員長

皆さん、こんにちは。

吉野委員から欠席の通告を受けております。

定足数に達しておりますので、ただいまより、議員定数検討特別委員会を開会いたします。

それでは、本日の会議を開きます。

初めに、本委員会の会議録署名委員を私より指名いたします。

署名委員に、伴委員、紀委員のお二人を指名いたします。両委員にはよろしく願いをいたします。

それでは、本会議から付託を受けました発議第4号 斑鳩町議会の議員の定数条例の一部を改正する条例についてを議題といたします。

会議を開く前なのですが、私の考えで申しあげますと、本日の会議で結論を出すことは控えて、12月の定例会中に結論を出していただきたいと思いますねんけど。各委員の皆さんはどうですやろ。それでよろしいですやろか。

（ 異議なし ）

委員長

それでは、前回の委員会においても、いろいろとご意見をいただいておりますが、引き続きご意見をお受けいたしたいと思います。

里川委員。

里川委員

まず、私なりに調査をしましたが、前回、委員会の中で申しあげた件もありますので。年金との関係ですね。定数やったり、報酬やったりが、関係あるのかないのかということだけ、確認だけとりあえずさせてもらっていいですか。

委員長

藤原議会事務局長。

事務局長 斑鳩町が定数を削減することによって、年金を受給されている方の年金額等にどのような影響があるかというような趣旨のご質問かと思えますけれども、直接的に斑鳩町が定数を減少することによって、支払われている年金額に影響するということはありません。

委員長 小野委員。

小野委員 前回、私事で欠席して申し訳なかったなと思いますねんけど、議事録を熟読させてもらって、あくまで文章で読んでいる限りね、ちょっとニュアンスが違うのかなという意見もありますねんけどね、私はこのことについて、いろいろとちょっと質問をさせていただきたいんですが、提出者にいろいろな説明をしていただきたいなと、そのように思っております。

それはなぜかって言いますと、議案を提出するということは、特に条例改正とかについては、その妥当性とか根拠を説明して立証しなければ、私は、いけないものだと思います。ただ単に雰囲気的にこういう具合なものを条例改正するんだと、そういうことであっては、私は、議論したことにもならないし、この議会というものをないがしろって言ったらかかしいですけどね、そういうものであるんじゃないかなと思います。これから少し提出者が、この条例改正するにつけての要旨というものを付けていただいていますので、その要旨について私なりの考え方を申しあげて、その提出者の方の説明を求めていきたいと、そのように思っています。

それでは、前段の、要旨の前段ですが、「議員定数に関しては、現状の15人を維持すべきとする意見と削減数に隔たりはあるものの、議員定数削減をすべきとする意見の両論併記でありました。」と、こういう認識なんですけど、私はこの両論併記という言葉、そしてなぜこういう言葉を出してこられているのかということについては、別に今、議論しようとか、そういうことは思っておらないんですが、この答申された時

の、議員定数についてということで、議会運営委員会はそのまとめとしてね、現行の議員定数15人を堅持すべきという意見、これはいろんな根拠を示しておられます。議会運営を困難にするものであるとか、いろいろな、議会活性化研究会の最終報告に基づいてもこういうことがはっきりと書いてある。それから、また、現在の議員数、15人というのは、財政的にも無理がない。それで、更にこの委員会の充実を図るべきであると。それから住民の代表として町民の多様な意見を代表するもので、議員削減をすると政治に住民の声が届きにくくなると。そういう根拠を示しているんです。一方、議員定数を削減すべきという意見、これは複数所属制度のもとで議会の機能を果たしつつ、定数削減を前向きに検討すべきである。何名にして前向きにやるんだという、その何名にすると、削減ということは何名ということを書いておられないんですね。その機能を果たしつつ定数削減をどうするんだというその根拠も出てきてない。それから、議会の責務を果たせなくなるような極端な削減はできないが、議員数削減を望む町民の声もあり、若干の削減はやむを得ないと。町民の声もある。私も聞いております。だけど、それは、もっとしっかりやってくれと。叱咤激励の意味で、言葉は適当ではないですが、何もしていない議員もおるん違うんかと、削減せえと。そういうことは私も聞いています。だけど、それについては、議員はこれだけの委員会が必要です、これだけの人数が必要です、最低こうですと。いろいろ前回の時も議論されてましたけど、17年から18年にかけての今の中西議長、その当時も中西議長でしたので、議員定数と、それから委員会のあり方ということで諮問を受けて、里川、当時の委員長、それから副委員長は飯高さんということでね、議論しました。私もその議運のメンバーでしたので、議論しております。その結果、18年に条例改正して15名ということで、皆さんもよくご存知だと思いますけどもね。それで、今回また、嶋田議長のほうからの諮問を受けて、議会運営委員会ではいろいろ議論しました。そして、その結果は、意見集約をできない結果となりましたと。そういう回答をさせていただいたんです。皆さんにもそのことを報告して、それで議長にも報告した。私はね、その諮問

に対する回答として、議員定数については集約ができなかった。そういう集約ができなかった。根拠を示しているのが、議員定数15人を堅持すべきという意見、それだけですのでね。両論併記とか何名にするという根拠を示した意見がない。そのことでこういう結果を出させていただいているということは、私は、15名に堅持する、15名と、斑鳩町議会は決めた、再度ね。そのように解釈しているんですが、そのことで、今、13名ということを出してきておられますが、その前段として、両論併記でありました、これは両論併記だから今出すんだという意見、議論なしで出すんだという意見だと私は解釈してますけど、これは少し乱暴な議員提案の仕方だということになると思います。それで、一旦そこで、私は、15人と決めたというふうに考えておりますが、提出者のそれについての説明をお願いいたします。

委員長 嶋田委員。

嶋田委員 私の認識では15名、現状維持と、それで減らすべきだという各種意見がありました。それをもって両論併記という解釈をしております。

委員長 小野委員。

小野委員 嶋田前議長がそういう思いで議会運営委員会に諮問されたということが、私は、意外だなと思います。議員定数について検討してください。定数について。一方、その中で15人というのがある、確かに減数すべきだと、全協開いても減数すべきだという意見も多かったんです。だけど何名とする、根拠をきちんと示して、出してこられた、それはなかったと思うんです。だから私はそういうことを両論併記という言葉が表すことがおかしいと思いますし、答申の結果は15人、現状維持の、現行の15人と、その時に、斑鳩町議会は結論付けたと、そのように思います。

去年の議運の委員長である中西現議長がね、平成18年に16人から

15人に条例改正したときの議長でもあり、議員定数のように、議会の根幹に係わるよう条例改正は、採決で決めるものじゃない、好ましくない、そう判断されております。そして、根拠を示して出てくる定数は、15人だけで、採決を取るには不可能な状態であると、私はそのように考えています。だからこそ、再度申しあげますけど、この諮問を受けた議運の審査結果は、議員定数は現行の15名で、両論併記という言葉はあたってないと、そのように申しあげます。それで、私は何も、議員発議を否定するつもりは微塵もありません。しかし、当時の議運の委員2名と、この答申を受けた当時の議長、また、今年度の議運の委員長として、私は議員定数についても議論していくことを提案している中で、このような議員発議をしようとする、されたという行為については、議会人として大いなる疑念と疑問を持っております。

その次に、要旨の中段、「国においては一票の格差是正のため0増5減の」云々と書いています。このことについてね、私は、一票の格差というものは、これは国会議員において起きることであって、なんら意味のないことを定数減、斑鳩町議会の定数の減の条例改正を出す、その要旨として引用してくるということは、私は、これはちょっと言葉が悪い、もっと悪い、無知だと、それで、ナンセンスだと言わざるを得ない。また、その次の「斑鳩町の近隣市町議会においても議員定数削減が可決されています。これらの現状から、議員定数削減は国民や地方住民の強い意志の結果であり、当町においても避けて通れない問題であると考え」、避けて通れない問題であるから、議長諮問を受けて議会運営委員会では継続して審議しているんです。そして、皆さんの意見を聞きながら、議会運営委員会としてまとめていっている。それと、私はいつも言っております。再度、これは前からも載っている話なんですが、全国町村議会議長会の議会の活性化方策の提言として、議員必携に、「議員定数削減を是とする風潮は議会制民主主義を危うくし、現行の常任委員会制度を中核とする議会運営を困難にするものであり、議会の存在意義を身をもって示すことによりこの流れを阻止するよう努力する。」、このように報告、提言もされておるんです。これはね、私は、この要旨に書

かれていることは、何回もこのことは私は出しています。以前の、諮問された時の意見として、私はこれを出しています。そういうことを完全に無視したね、根拠ない理由であってね、私は当時も話をしていたと思うんですよ。こういうことがあるんだから、現状維持をやろうと。そのために、また、今、継続で議会運営委員会でも諮ってますけど、やはり自分らの資質向上、それを住民の皆さんに理解してもらう、そういうことをやりかけている時に出されているし、このことについてね、こういう提言があるということに対してね、どのように認識されているのか、やはり、議会制民主主義を危うくし、その中に書いてあることも、概説も熟読してもらえれば、今の定数でいかなければいけないという、そのことが明確にわかるはずなんです。それをあえて、この、こういう提言を無視、無理解して、この要旨に、住民の強い意思であるとかね、そういう美辞麗句を並べて、いかにも13名にすることが必要だというふうに、このように出されている。そのことについてね、私は、この提言をどのように理解されているのか説明をしていただきたい、そのように思います。

委員長

伴委員。

伴委員

今、小野委員の考えに対して、私の思いですもんけど、結局、議員必携の、読ませていただいて、確かに今回10名とか、8名とかっていうような数字をもし提出者が出したのであれば、おっしゃるとおりやっぱり回っていくのかというお話になっていくと思うんですね。13という数字というのは、13であれば、議会の力を落とさずにやっていけるんじゃないかと。先ほど国やとか、近隣の市町村の話もされました。やはり、それだけの数が本当にいるんですかという声だと思うんですね。だから、提案の趣旨にそういうのを書かせていただいたというような格好で、結局、議会を弱体化する、そういうようなことはしたくもありませんし、この13でも同じようにやれるんじゃないかと、皆頑張ればやれるんじゃないかということで、その思いで提出させていただきました。

以上です。

委員長

小野委員。

小野委員

そういうあれがなかったら出しませんかね。当然、そういうことの答えが返ってくるだろうと思っておりますが、残念ながら、それは間違ってます。はっきりと申し上げます。というのは、前回の16人から15人、かけてた時の、その資料というものは、当時議員でなかった伴委員は議事録でしか確認できなかつたと思いますが、あの時に、里川委員長、それから飯高副委員長、この議会運営委員会がいろいろと議論したんです。やはり、定数削減をしなければいけない。財政的にもそれ以上のことを検討しなければいけないということで、先ほども言いましたけど、今の中西議長から諮問を受けて、議会運営委員会で議論しました。そしてね、その中でどういう具合にして15人ということを組み立てたのか。その時はまだ複数制が取れなかつたので、簡単に、委員会の5名、5名は最低限というか、5名は避けなければいけない。というのは、5名の委員会で1人欠席があれば、委員長、副委員長と他の2名で、それが委員会か、町議会の委員会かと、体をなしてない。それはどっか中でも、この議員必携にも載ってます。だから、5名ではしょうがない。だけど、その17年の議員定数を検討したときには、まだ複数制は。見えてました、確かに見えてました。だけど、定数としては三五、十五の1常任委員会制度を堅持したものの形だと。それで15名と、そういう形で皆さんに理解してもらって出していました。それで根本的に、それはおかしいやんかと言われたらしょうがないんですがね。斑鳩の町議会は、合併問題の時に、合併の法定協議会が立ち上がってる時に住民投票して、斑鳩の町民は合併を拒否したんですね。だけど、そしたら議会としては、もうこの人数でしたら、どうしても委員会中心主義ということが取りにくいということではありますが、委員会中心主義をやっぱり堅持に努力しよう。1つの合併をしなくて、1つのこの議会としてきちっとしたものを出していくのにはどういう、何人が必要なんか

と。増やすことはできませんわね。増やそうとしたらやっぱりいろんなこともありますのでね。だけど、最小限1人だけを削って、しかも報酬を1人分。これは前回もいろいろ議論しておられるから、皆さん、今の議員さんも皆ご存知だと思いますしね。そういうことでやった。

そしてその次の年、今の委員長の中川議長でしたけどね。同じ項目で諮問されたんです。というのは、複数制の取り入れるということを前向きに検討して、やっていこうと。やっぱり議会の活性化を図るために自治法が改正されたんです。そして、その時は私は委員長でした。それで、以前議運の委員長であった里川さんが私のサポートという形でやっていただいた。そしたらその中で、やはり、13名でいこうという案の委員さんもおられたんです。それで、前回にも松田議員の名前も出てますけどね。確かにね、大先輩の松田議員はね、それでやっていこうと。それで視察とかいろいろなことを研究して、出してきた意見、結論がね、委員会は5名ではだめ。しかも、議員定数を19年から15名にしている都合上、議長を除いた14名が半分、7名もだめ。今、やってますよ。あれはだめなんです。なぜかと言ったらね、あれは、委員会中心主義やないんですよ。

この、今の特別委員会かて、いろいろ委員長も苦労されていると思うんです。こんな全員の委員会で、委員会中心主義をやっているのかということなんです。私は議会運営委員会で、これは認めました。いろいろな議運の人の意見。私は、委員会中心主義をやっているんだから、この議員定数の住民発議をどこへ付託しよう。そうしたら何か知らんけど、即決だとかね。それらのことは皆置いといても、やはりしっかりしたものの考え方で出していただきたい。それで、私は休憩の間にね、今の委員長、中川委員長に、その時は委員長違いましたけど、いろいろ話を聞かせてもらって、特別委員会ではだめですかということで、結構ですよと。だけど、その特別委員会をその時点で最終日の全協の前に特別委員会の委員さんのメンバー7名というのが、選び方ができないですよ。だからそんなん全員のものではあかんと言うたんやけど、それでしかやったことありますやろ。確かに法定協議会が発足した時には、合併

の特別委員会、議長を除く全員でやったことあります。こういうふうにしてやったことあります。それと、これらを審議するための特別委員会で全議員が参加するというような特別委員会の設置をしたらおかしいんですよ。これはなぜかと言ったら、これは委員会中心主義ではない。

同じことで定数の、議長を除く14名の内の7名、今年度やってます。これは、委員会中心主義でない。そして、同じような、先ほど申しあげたときに、議運の視察としていろいろな情報を集めて、2常任委員会で委員会中心主義、委員会付託をしている議会があるということを調べて、そこまで議運として行きました。そして、その時の里川副委員長の感想、それから松田大先輩の感想、これは形式的な付託をしているだけで本会議中心主義となんら変わらない。その結論が出たんです。だから、松田議員も、その時点で13名という提案、それはできない。7名の委員会を構成していったら、それは違うと。だから15名の議員定数については、もう審議しない。そういう方向で議会運営委員会は進んでいったんです。確かにね、松田議員は、委員長が勝手にそうして進めていく、こちらをなぜ審議しないんやと食ってかかられたことでもあります。だけど、そういうことを証明することによって、松田議員も理解された。だから、当時の中川議長から諮問された、同じように議員定数と委員会のあり方という、同じタイトルです。議員定数については、審議しなかったんです。だけど、前回の時にも、松田議員もそういうことを言うておられたとかいうようなことも、その議運のメンバーおっしゃってますけどね、なんでそういうことを理解できてなかったんかなと、私はもう残念です。

だから、あの時には、もう議員定数を増やしていくわけにはいかない。15名となっている。それで、複数制の自治法改正の趣旨をつかんで、予算委員会を創設というか、設立させたんです。これは、その自治法の改正によって、それはもう、例えばと、この議員必携に載ってます。国会のように予算委員会をして、予算執行についての議会としての常にチェックを入れていく。そして、6人の委員の構成で、もうその時点では6人しかできない。しかも定数は15人から下げることができない

い。6人だったら13人にできないでしょ、半数がくるんやから。そういうことの流れできている中で、今、伴委員がね、できるんじゃないかなんと思っているということなんです、これは、私はできない。その議論をして、その数字合わせだけで、今回これの最後の要旨にね、言っておられます。「議会機能を維持しつつ町民の負託に応えるには13名は絶対に必要である」。そして、前回の時に提出者の人が、1人が、6人の委員会で4常任委員会にしたと。四六、二十四。だから、12人プラス議長で13名。これが今回の提出者の根拠なんです。これは今、伴委員が答えられたように、議会の機能を維持しつつ町民の負託に応えるには13人が絶対に必要だと、だからそれが13人だということの提案ですがね、これは、6人の委員会は、それは委員会中心主義のことから外れていく、そういうことなんです。だから、私の意見としてそういうことを言ってますがね。これは、今、提出者の方が考えておられるような問題ではないんです。もっといろいろな議論をしてきて、15人というのを堅持して、それで、昨年に議長から諮問を受けた時にも、私はこういう意見も言ってます。

そしたら、なぜ議運のメンバーであるが、今、この25年度ですか、常任委員会を1つ減らしてと。減らすことについては、全員一致でした。やはり、予算常任委員会という、国会で一番の権力があるといったら語弊がありますが、一番のやはり制度の対してのいろいろなことも言える場所ということは、そういう場所をもって、私も、里川副委員長とも相談して、予算委員会を、常任委員会を設置しようとした。それで皆さんの同意を得て、条例改正も19年にしています。だけど、その運営については、やはり地方議会では難しいのかなという感じを受けました。だから、この予算常任委員会には、私もやめておこうと。

そうした段階で、私は、この答申にも書かれています。その委員会構成についてね。新たな委員会構成でという意見もありましたが、それは、私以外の全員が反対されました。なぜ反対されたのか、私はわかりません。せっかくね、自治法が改正されて、常任委員会を増やして活性化を図ろうとしているのに、いや、もういらぬ。こんなん、斑鳩町議会と

いうのは後退させているのと一緒ですよ。だけど、私1人が頑張ってもどうもできませんわね。委員会の中で。議運の中で。そして、さらに悪いことには、7名は過半数じゃないという理由から、7名の常任委員会に条例改正してきているんです。斑鳩町議会がね、活発な議会運営をやっているということで、今までの先輩たちに申し訳ないですよ、それを後退させるということは。だから、こういうことに対してね、真剣に取り組んでくれているのか、私は心配ですわね。私も5期目です。本来は、前回失敗しなかったら6期目です。今までずっと皆さんと、松田議員とか名前出てますけどね、いろいろいろいろ議論してやってきて、進んでいるんですよ。それにそんな後退するようなことで深めていって、しかも、それでできるから、7人でできるから、今度は6人の委員会を4つで四六、二十四だから13人でいけますと、こういうのをね、出してくる、その人たちの、私は、考えがね、どうにもわからない。だから、そのことについてね、できるんですという根拠を示してください。13人で、6人のまず委員会が、本会議に対してどういう働きをするんだと、どういう作用があるんだと、だからそれは委員会中心主義が、まあ言うたら正確に、正常に作用しているんだということを証明してください。

私はね、今、こういうことが出た後でも、今、議会運営委員会でも、いろいろなことをやろうとしています。その中で、やはり一番先に、今の委員会、もう1つの委員会をさっそく提案してみたいなと、そのように思っています。やっぱり斑鳩町議会はね、いろいろな、そんな簡単なことで後退させるようなことはしないでほしい、そのように思います。そのことについてね、説明をお願いしたいなと、そのように思います。

委員長 今の小野委員の、13名、議員定数13で、常任委員会の委員数が6名で、成り立つということに対して、根拠を示してほしいということなんですが、どうですやろ。 伴委員。

伴委員 先ほどおっしゃるように、定数の半分近くの委員会、13にすれば、

6というのはもう半数ということで、それでは委員会中心主義が守られているのかというお尋ねやったと思うんです。今現在、そうでしたら、今現在回っていつているかどうかと言えば、今これも、ちゃんと議会は行われ、していると私は思いますし、また、以前、私が来る前には、もっと数が少なくなった時期もあったかというのも聞いております。その時も議会はちゃんと動いているというように思います。病気で長期で休まれた、そういう時も回っていたという部分からいけば、それはそれなりにいけるんじゃないかというような思いを私自身は持っております。その辺は意見の違いがあるとは思いますがねんけど。以上です。

委員長 嶋田委員。

嶋田委員 委員会中心主義、なるほど大切です。1つの問題について、それに専門家みたいな形でいろいろ審議すると、そういうことは大切です。斑鳩町議会ももちろんそういうことでやっております。過半数やから委員会中心主義でないというのは、僕、ちょっと理解しにくいんです。ほんで、過去6年間、複数常任委員会制でやってきました。その中で、たとえ2減になっても、複数常任委員会で委員会制を確保できるということで、私は考えております。

委員長 小野委員。

小野委員 まず、伴委員の、以前は5人の委員会で1人が死亡という不幸なこともあったんですけど、4人の委員会があったんですけど。だけど、何も議会は止まりも何もしてません。だからいいのかという問題じゃないんです。議会というところは、意思決定機関なんです。住民のための、町の意味決定機関なんです。4人で、正副委員長と2人の委員で、斑鳩町という意思決定機関が、それを議論する場としての体を成しているかという問題なんですよ。なんのために合議制をとって執行部と対峙してるんやということです。もちろん4人の委員会でも、それできます。

それと今、半数だったら、何もそれは委員会の専門性は発揮できるし、多いほうがよろしいと。だけど、委員会中心主義というのは、本会議中心主義の形式的な議会でないということの、前向きな考え方で委員会中心主義なんです。そういうところに委員会が本会議と同じ、同数の者がいてる。半数がいてる。これは、本会議から付託して議論して、また同じことをこちらへ出すだけで、全く形式、実質は本会議中心主義なんです。何のために委員会中心主義というのは、委員会で、もちろん掘り下げるといふことも必要です。だから、その結論をもって本会議で再度その意思決定をする。重要な議会ですから、再度本会議でも議論してもらいましょう。議論する余地ないんですよ、半分やったら。先ほどこの全員の特別委員会をやるということは、こういう問題で設置するということは、本来これは間違いやということも私は言うてます。そういうことがわかれば、はっきりと半数ではだめだといふ。それらは何度も繰り返します。18年から19年にかけて、里川副委員長と私が何度も繰り返して議論しました。松田議員の意見も聞きました。視察も繰り返しました。その上で、斑鳩町議会は純粋な委員会中心主義を継続させていくという結論になってるんです。これは誰のためでもないんです。住民のためです。議会というものはそういうものだ、という形式ばった形のばかりやっているところでは、私は、こういうことは皆さんもされておられないと思いますけど、執行部の追認機関、そない揶揄されてもしようがないと私は思うんです。その点をしっかりと説明してもらいたい。けどもう説明云々の話はね、私は結構だと思えますけどね。

それだけのことを熟慮した上で、こういう大切なことを議員提案といふことを出してくるのは、私としてはやっぱり理解できない。そのために議会運営委員会でそのようなことについてまた議論しよう、つねに議論しよう。そしてその中で皆さんに説明がついて、こういう具合にしてやりますけどといふことで、意見をいただいて、そして議会運営委員会として条例改正なりそれをしていくのが、こういう問題だと思います。今でもそう思ってます。そのことに、何か説明者の方にばかり追及し

てますけどね、これは当然なことなんです。こういう重大な議案を提出する限り、そこらのことをきちっと、説明責任がある、ということになってくるのかな、そのように思いますねんけども。こういう発言をしてどうのこうのということじゃないんですが、やはり提出者以外の方にもそこらのことをしっかりと理解してもらいたい。私はそういうことを思っておりますので。

なにか偉そうな言い方になりますが、私が平成3年に議会に来た時、1期目の時は何のことか全然わからなかったですよ。だけど、2期目の時にちらちらと、松田議員とかにいろいろ、中川雅司議員とかに議会運営についてやっぱりいろいろ教えてもらった。その中で進めてきた。そういう誇りがあるんです。それで、奈良県の中でも斑鳩町の議会運営は進んでいるという評価も受けてきたし。残念ながらこういうことで議員定数を減らそうとか、私は15人に決まった時に、隣の安堵町の議員からね、いろいろなことを言われたんですよ。うちやったらもっとするでと。向こうの町長の前でそれを言ったんです。だから、島田町長がその議員にね、小野さんの言うてるのが当たり前やろと、議会というものの、議会人やったらそういうことを考えるのが当たり前やろと言うて、その議員は怒られていたんです。だけど、あそこは10人にしました。だから、なぜ下げやんないかんのかということ、それがはっきりとした段階では、15人まで下げて、本来は財政的にももう1人ということで、皆の報酬もカットしようという提案をして、それで、里川委員長の下に条例改正しました。

それとね、その時に、前回のあれでも意見言うておられますけどね、そういう具合に条例改正したことについて、財政、何でしたかね、委員会、財政健全化検討委員会、いろいろ言ってきました。いろいろ言ってきたことがある。いろいろ外野で話してきたこともある。それで、1回懇談会をしたいということで申し入れを受けました。私は当時の委員長、副委員長ではありませんし、ただ、議会運営委員会のメンバーですので、委員長、また議長にお願いして、その場所に同席させてくれということで、それでいろいろ議論しました。何を言うておられるんだとい

うことでね、大分けんか腰の話もしました。最終的には、この財政健全化検討委員会というのは町長が設置しただけのことで、条例で設置されたものではない。その意見をそういう、まあ言うたら弾圧ちゅうんですか、そういう指導を受ける必要ないということで突っぱねたんです。私らは住民の代表だとまで口走ったんですよ。口走ったってえらい失礼な言い方やけどね。何をのぼせ上がってるんだということだね、考え方になった。そういうこともわからないその財政健全化検討委員会、町長に食ってかかったんですよ、何を言うてるんやと。

そういうことを踏まえて毅然と15名というのを決めてきているんです。それが今ずっといろいろ話したこと。しかも複数制を取り入れられると、そうしたらいち早く取り入れて、複数制で予算常任委員会を設置しよう。だけどその運営については、少し戸惑いって言うんですか、もうちょっと、少し動かしたらよかったのかなという感じもありますけど、やはり国会の予算委員会、先ほどもお話しましたが、ちらっと。そしたら、この答申にも書いてます。私は、これは私が提案したんですよ、教育委員会と福祉課を所管する委員会を設置しよう。委員さん、皆さんそなんいらんという。やっぱりそうしてね、日に日に成長していかなあかんのですよ。後退するということだね、あえて私は提案してもらいたくない。今、議会運営の委員長させてもらってますけどね、だからこそ言うんじゃないんですよ。議会運営委員会というのはやはりそういう、1歩でも前進していこう、里川委員もおっしゃってるやん、前のときの委員長も、1歩でも前進していこうと。

まあ、何回も繰り返しても一緒ですので、なんか休憩せんなん時間違うんかな。委員長、どうですか。

委員長

ちょっと1点だけ教えて欲しいんですけどね。13人の議員定数で議長省いて12人、それで委員が6人やったら半数やと。今の現状も、15人で議長省いて14人の7で半数やと。そしたら今も、委員会中心主義がなってないということなんですか。 小野委員。

小野委員 そうなんです。なってないんです。それは先ほどから言うているように、2つの常任委員会で委員会中心主義をやっているということで視察に行ったこと、その時は委員長は議運のメンバーかどうか知りませんねんけどね。その時に視察に行った時に、2つの常任委員会で、これ、半数いてるんです。そしたらその時に、もう忘れましたがね、私、向こうでの話。この委員会同士のね、引っ張り合いなんです。だから、片一方が満場一致でやった場合に、他の委員会に所属している人間は異論を言うたらいかんというような、そういう形をとってきているんです。それがね、議会が委員会をつけてやっている形で、しかも委員会中心主義の審議の仕方かというような問題、同じことが、半数の委員会があれば。だけど動いてますよ。だけどそれは、純粋な委員会中心主義ではないということ。だから違法ではないんですよ、そういうの作るの。

委員長 そういう規則もないやろうから違法でもないというのもわかるけど、小野委員言わはるように、13の6にしたら具合悪いと言われるんやったら、今も具合悪いということで、そこらは。 嶋田委員。

嶋田委員 私、委員会中心主義というのはね、先ほども言いましたように、専門性を持って、深くその1つのことを掘り下げて審議すると、それが委員会中心主義だと思うんです。委員会の意見が大事であれば、過半数以上委員会こしらえて、本会議関係なしにやっつけばええだけのことで、そしたら委員会でやったことが覆えられないという形になってきますわね。そやから、委員会で審議しはったこと、本会議では覆す可能性があるということで、可半数以下だという考えでもって、過半数以下になっているんだと思うんですけれども、別に過半数であっても、最終的には議長判断で結論は出てくると思いますんでね。僕は、一番の委員会中心主義というのは、専門性を持って深く審議すると、そういうことだと思ってます。

委員長 全く的外れてます、はっきり言うて。そのね、専門性を持ってすると

いう、これは二次的なもの。本会議から付託をされてきた委員会が本会議と同じ結論しか出ないという、これは本会議中心主義なんです。それらをしっかりとやっぱり認識してください。そういうことを、先ほどから何回も言うてます。中国地方やったんかな、そういうところもあるということで調べて、議運で視察に行った。その時も松田議員も委員でおられたし、向こうの説明聞いて、もう即座に、こんなん委員会中心主義ちゃうんかと。だけど、いろいろな情報のところに、2つの常任委員会に委員会中心主義でやっていると、堂々と書いてます。それで聞きに行ったら、先ほどから言う節。だから、その時点でね、私ら、里川さん、そのときの副委員長も松田議員もね、15人と決めている限りね、7人の委員会は作れないと。だからあの時は6人の委員会しかできない。委員会のあり方ということで中川議長から諮問出たけどね、その時に、もう6人の委員会しかできない。複数制を取り入れても7人は作れない。というのは、15人で定数決めてます。ということは、15人の定数を決めたということをして18年の条例改正してますから、18年から19年にかけて議員定数について議論、審議する余地はないという、委員会としてはそういうことを出している。それを当時の中川議長は了解して、議員定数については審議しませんということで返している。受けてくれてるねんで。だからね、先ほど嶋田委員がおっしゃるようにね、そら確かに委員会中心主義の1つの要素は深く下げるということ。だけど、本会議から付託される。本会議があるんですよ。そしたら本会議から付託されている。本会議で何も議論する。先ほど委員長も言うている。本会議より多いものをしてたら、本会議でもう何もひっくり返すとかそんなないやんか。全く私はね、認識不足もはなはだしいと思います。

委員長

委員会中心主義というのは、本会議で議決するんやなしに、委員会に付託して委員会できめ細かくちゅうんか、専門性も出して議論してもらって、ほんでまたその委員会で結論出してもらったのを本会議に返してもらおうっていう流れなんが委員会中心主義なんかなと。その過半数以

上あって、例えば委員会で決まったものを本会議でもう、否決したものは可決でけへん、委員会が可決したものは否決できへん、そういうのが委員会中心主義じゃなくて本会議中心主義に変わってしまうのかな。まあこれは、そんなんのどこにも載っていないねやろうけど、皆、その人、その人の考え方ってあるのかな。

他の委員さんどうでっか。 里川委員。

里川委員 先ほどからお聞きしてましたら、私の名前もなんか何遍も出てくるんで、ちょっと私も発言をさせていただきたいというふうに思います。

本当に私も議運に長いことずっと入っております、いろいろな研究をさせていただきました。小野委員がおっしゃるように、半数おるというのは好ましい状態ではないと。今、現在も各常任委員会に7名いてるっていうのは、私はちょっと多いなというふうには思っております。でも、これを議会運営委員会で決められて報告をされた時に、まあ皆さんの意向がそういうふうな意向であるのならばということで、私はあえて受け入れはしております。ですから、受け入れてはおりますけれども、本来は、委員会中心主義というのは、委員会で結論を出していく。言われるとおり、深く掘り下げて結論を出し、専門性も生かして十分な議論をし、それを本会議へ返す。本会議へ返したときに、いくら委員会で頑張ってやっていただいたとしても、委員以外の方々が、それにはどうも納得でけへんのやと言うた場合、本会議でひっくり返ることもあったり、あり得るといような、やっぱり緊張感を持った議会構成というのか、そういうのがより望ましい。本当に真剣勝負というのか、本当に住民の皆さんのための議会にしていこうと思ったら、そういう形を取るのが最も形式としては望ましいというふうには私自身も思っております。ですから、常任委員会制の取り方も、今ちらっと、私は今、議運のメンバーではないですけれども、委員がおっしゃったように、常任委員会制のあり方をどう考えていくのか。だから、私はね、議会基本条例に、今、定められてきているようなことを、今後、斑鳩町が、地方分権が進んできて、斑鳩町が、今まで県や国が持っていたやつを斑鳩町で条例どんどん

作ってね、やっていく中で、どう議会の権能をあげていくのか。そして、どう、その議会の中身を住民さんに知っていただく、理解していただく、議会が見えるものにしていけるのか。そういうところで、議会基本条例のことは、私はいろいろ、ちょっと前回も言わせていただいたんですけど、そういうものを目指しながら、私たちが資質向上を目指し、頑張っってやっていきたいというのが私自身の意見ですし、前回も申しあげていたと思うんですけども。

それと、続いて1点、ちょっと言いたいことがあるんですけど、よろしいでしょうか。財政の関係なんですけれども、議員年金なくなりましたね、制度として。先ほど、議員年金は、私たちの定数であったり、報酬であったり、一切関係ないと。今貰ってはるのはもう国で決められた基準で支給されている。交付税で一旦斑鳩町に入ってきて、斑鳩町から支払われるというふうなシステムに変わりました。変わった中で、じゃあ24年度、財政的に厳しいということで、私も交付税の関係も調べさせていただきまして、見させていただいたんですけども、全体の支出から議会費が占めている割合というのは1.3%なんです。1.3%ですが、そのうちですね、1億2,185万6千円、決算ですね、24年度使ったんですよ。その内、交付税で入ってきているのが8,432万6千円、差額が3,753万円差額あるんです。これは、まるまる町の、町税とかの町の収入から賄わなければならない。その時に考えたんですけどね、全体の一般会計の交付税算入されての率が1.3%だったんですが、町税収入から見て、この、町が単独で得る収入の中からこの3,753万、何%やって言うたら、やっぱりこれイコールなんです。1.3%なんです。だから今、まさに交付税で入ってきている分とそういうふうな自前でいっている分と比較しても、比率が1.3%で、ちょうど今、年金のそういう支給方式変わったけれども、今、ジャスト、そういうふうな形でね、均衡が保っているような状態やなど。財政的にね。それをさらに減らせって言うのであれば、提出者の皆さん方は、いったいこういう財政的な面も前回もおっしゃってましたけれども、いったい交付税が入ってくる率と、それから自前の金額、それが

1. 3%っていう議会費っていうのはね、前はもっと1%もなかったんですよ。年金払ってないですからね。今は、23年から変わって、年金、一旦交付税で入れられて、年金が斑鳩からOBに払われるようになってますからね。その分が入ってきているから議会費が膨れているんですね。だから、私もうちょっと、委員長先ほど結論12月っておっしゃっていただきましたけれども、ちょっと以前のやつも数字拾いながら、ちょっと比較検討しながらね、今でも24年度決算で見た場合はちょうど交付税の算入率と自前の負担率がちょうどイコールやったんでね、ああ、これでちょうどいいのかなと、財政的にはこういう今の考え方ぐらいでちょうどいけてるのかなっていうふうには思ったんですね。それよりかはそれで、それが非常に厳しいっていうのなら、もうちょっと考えなあかんのかもわからないんですが、それでイコールなのであれば、私が言ったように、もっと議会基本条例の中に書かれているような案件について、私たちはその中身を話し合いながら、もっとも自分たちの権能を高めるための資質向上をして、そしてそれをやっていますということ、議会というところはこういうことをやっていますということ、町民さんにもっと本当にわかっていただけるような、もっとも私たちが工夫をする、もっと私たちが努力をする、そのことのほうが先なんじゃないかなっていうことを、この財政的な面を見る中でより強く私自身は感じたんで、提出者の皆さんはこの辺のパーセンテージについてはどんなふうに、いや、もっとそんなもん1.3やない、もっとも抑えるんやと思っはるのか、町長さんみたいな気分で思っはるのか、なんかわからへんねんけど、私は議会人としては、議会人としてこうなかなっていうふうに思ったところなんです。意見として言わせていただきます。何か提出者の方のご意見があるようでしたら、お聞かせいただいたら結構かと思えます。

委員長

今の里川委員の意見に対して、何か意見あったら、申しあげていただいて結構ですし、別になかったらないで結構ですし、どうでっか。

辻委員。

辻委員 今、里川議員、財政的にということ、私も財政的には、別に、ここに書いて、別に財政的に今、斑鳩町が苦しいということでは、今のところ、そういう判断で議員定数削減ということは、財政、削減できるのは削減できますけども、財政的に厳しいということはしてません。

それとまた交付税算入の基礎ということで、実際ここに入ったのかどうかというのはなかなか難しい、これ、算入の根拠だけであって、それが実際入ってきたのかというのは、総額でしかちょっとわからない、歳入としますので、その辺もちょっと調べてみんなんということもありますけども。

委員長 里川委員。

里川委員 私ね、ちょっと平成22年、23年、24年の3年間しか拾えてないんですけどもね。23年は年金がいきなり市町村から支払うような形になったんでね、議会費の単位費用がどんと上がったんです。それで、平成22年度は単位費用が2,210円掛ける、その、補正係数もありますからね、それで、7,604万ほどしかなかったんですわ。ところが、23年になったらね、年金を一旦町へ入れて支払わなあかんということになって、単位費用がね、3,020円に上がったんですわ。一遍にここで800円ほど上がりましてね。ほんなら1億359万5千円、議会費として入ってきているんですね。だから、こういうふうに議会費として、その内訳はわからないんですよ。議会費の単位費用としてもうそんだけ。だから、今さっき私言ったんが、24年度はそういう計算の中で8,432万6千円、これが入ってきてますということは財政課のほうで確認をさせてもらってますので、議会費としてはそんだけ入ってきてます。私、あくまでも議会費としてのくくりで支出された歳出の金額を元に申しあげているわけであって、細かい内訳は私もわかりませんし、そういう、交付税には細かい算式は、議会費についてはないんです。今後の推移は見ていかんとあきません。OBの数でうちが交付税、

単位費用決められたらそれで掛けてやられると、人口掛ける補正係数がありますから、補正係数で一応斑鳩町は補正係数やりましたら人口3万4,303人という係数も人口規模というふうに見てもらって掛けているんですけどもね。ただ、単位費用下がったら、なんぼそれで掛けても下がってきますけど、うちのOBの数とそして単位費用と、どんなふうに今後なっていくのか、そういうところもちょっと見たいなと、私、思っているんでね、もうちょっと時間が欲しいなとは思っていたんですけど。それと、前からの流れと、ちょっと今後の予想と、もうちょっと分析、私もしたいなとは思っているところなんですけどね。

委員長 木澤委員。

木澤委員 前回の委員会から通じて、私もいくつか質問させていただきましたけど、今回、議論を進めるにあたっては、定数削減ありきにはならないよということ、共通した認識としてね、議論はスタートしたと思うんです。ただやっぱり議論を進めていく中で、求められるのは議員の資質の向上やと言うけれども、やっぱり結局議論としては定数削減ありきの議論になってしまっているんじゃないかなというふう思うんです。今回、定数を削減しても議会の権能の維持向上ができるということの保証はなかなか見えてこない中で、提案者の議員さんからは、いや、できると思うという思いは聞かせてもっていただけてますけども、本来であれば、体質改善なり議会改革なりをこういう形で結果として示したというその結果をもって、議員定数減らしても大丈夫やというふうにそれぞれが理解をして、定数を削減をする議論に進んでいくとかね。本来あるべき形としてはそうなのかなと。今、これから議会改革も具体的に議会運営委員会で議論して行ってやっていこうかと、どういう結果ができるのかわからない中で、やっぱり定数を先に減らしてしまうということについては、私は、非常に不安もありますし、議論を通じても、やっぱりその根拠については、提案者の議員の皆さんからも根拠はないんやということなんで、答えはいただいているんです。

この間、委員会中心主義を守っていこうという議論はね、私もよく理解できますけども、結局、じゃあどういう体制をとっていくのかというのは、今いろいろ聞いていても、なんとなくやっぱり数合わせでしかないのかなというふうに感じてます。極端な言い方しますと、今、1人2つ常任委員会に所属できるというふうになってますけども、これを3つ以上とかいう形に増やしていけば、定数なんかどんどん削減していったかって、委員会に所属をして委員会で審議をするという形は取れますけどね、果たしてじゃあそれでいいのかということについてみますと、必ずしも委員会構成が中心にあって議員定数があるわけではないというふうに思うんです。この間ですね、やはり1人1人の議員さんが住民の皆さんからの思いや声をいろいろ聞いて集めて、議会に持ってきて、そこでいろいろ発言をするという、この議会制民主主義の基本的な形というんですかね、一端が見られたのが、先日、決算特別委員会でも議論しましたし、厚生常任委員会でも議論がありました、紙おむつの問題ですね。何人かの議員から紙おむつの配布枚数についていろいろ検討してほしいという意見が出ているけども、理事者のほうは、住民から直接その声は聞いていないんやというふうにね、おっしゃったんです。私も議員必携読んでますと、住民からの声なき声をきちっと集めて議会でその声を届けるというのが議員の役割やというふうに思うんです。そういう意味で言いますと、定数を減らすっていうのは、やっぱり住民の声が届きにくくなるということにつながってしまうというふうに私は思ってますので、だから、そこのところをどう保証するのかというのをきちっと示した上で、議員定数削減についてはやっぱり議論をしていくべきじゃないかというふうに。

前回と今回のいろいろ議論を、私も発言もいたしましたし、いろいろ意見を聞いてますと、どうもやっぱり根拠がないまま定数削減ありきで議論が進んでしまっているのではないかなというふうに感じましたのと、もう1点、財政の問題で言いましても、町全体の予算の中で議会、構成比としてどれぐらいの割合を占めるという点も、1つ住民の皆さんにお示しするのに根拠になるのかなというふうに思いますけども、こ

れ、提案者の皆さんの中でも、財政問題から定数を削減するべきだというわけではないという意見とね、削減するから効果があるっていうふうにはおっしゃいましたけども、その点については、提案者の中でもいろいろなかなというふうに、発言を聞いてるとそうですね。前回ですね、宮崎委員のほうから、定数を2減らすんだったら、報酬を元に戻して、いろいろな立場の人が議員として議会に選出されるようにするべきやっていう意見いただいてね、ものすごい前向きな意見やなというふうに思ったんです。

この間、議論をしてて、提案者の人に説明は求めますけども、結局、なかなか噛み合わない中で、もう少し具体的に、前向きにどう改革を進めていくのかなという議論が少ないように思うんです。それについては、今、里川委員もおっしゃいましたように、議会基本条例をどう作っていくのかということでもっと議論していきかけたっていう思いも出させていただきましたけども、それについては一定、議会運営委員会で、これから項目絞ってこういう形で改革進めていこうよというふうにやっていますんでね、今回それを検証する間もない中で結論を出してしまうっていうのは、私は難しいんじゃないかなと。委員長のほうから12月議会ぐらいでだいたい取りまとめをしたいというふうにおっしゃいまして、一定区切りをつけるという意味では、私は異論ないんですけども、ただ、この段階でこの議論をしても、なかなか削減をするということについて、私自身、理解できるものではないなというふうに感じてますし、住民の皆さんに示す根拠としてね、非常に弱いなというふうに感じてますんで、私の意見として申し上げておきたいと思います。

委員長

だいたい、いろいろ意見出ましたけど、もうきょうはこれぐらいで締めさせてもうて、次回またそんな、提出者の方々もある程度、根拠がない、根拠がないってこと言われてるんで、そういう根拠出せるんであれば、また出していただいて、こういう根拠やから議員発議することにしたんやということ、示せるんやったら示してもうたらどう。まあ、示せえへんのやったら示せやへんでそれはそれでええねんけど、そういう

ことで、今日はもう置きましょうか。

(異議なし)

委員長 それでは先ほどちょっとお願いしましたように、議長におかれましては、継続審査の手続きをとっていただきますよう、よろしくお取り計らいのほどお願いいたします。

なお、次回の委員会の日程につきましては、副委員長ともご相談の上、決めたいと思います。決まり次第、皆さま方にご案内をいたしますのでよろしくお願いをいたします。

なお、最終日の本会議で委員長報告がございますが、このとりまとめにつきましては、正副委員長にご一任いただきたいと思いますが、ご異議ございませんか。

(「委員長報告するの。結論も出てないし、全員出てるねんも
ん。」と呼ぶ者あり)

委員長 そうしたいねんけど、本会議から受けて、9月議会で結論が出やへんだと、そんなら継続に持っていったということを本会議で報告しとくほうがええのと違うかっていう、局長のアドバイスや。

ちょっと休憩します。

(午後2時50分 休憩)

(午後2時52分 再開)

委員長 再開します。

最終日の本会議で委員長報告がございますが、その取りまとめにつきましては、正副委員長にご一任いただきたいと思いますが、ご異議ございませんか。

(異議なし)

委員長

異議なしと認めます。

それでは、これをもって、本日の議員定数検討特別委員会を閉会いたします。

ご苦労さまでした。

(午後 2 時 5 2 分 閉会)